

「徳広さんから見た沖縄戦」

沖縄戦前の生活

私が昭和 18 年(1943)に知念国民学校(現在の知念小学校の前身)に入学して間もなく、担任の先生が徴兵された。その後、校舎の一部が日本軍の兵舎として使用されることになった。そのため、生徒は各字の事務所を転々と移動して、授業を受けることになった。また、陣地構築に民間人が動員されるようになった。

昭和 19 年(1944)の十・十空襲のあとは、避難壕を掘るように指示が出され、親戚や隣近所の人同士で壕掘りを始めた。このように、アメリカ軍が沖縄に上陸する前から、知念村(現 南城市)でも戦争の準備が着々と進められていた。

- ①担任の先生が兵隊になったり、避難壕を掘るように言われたりした時、あなたは思う？
または、徳広さんはどう思った？

避難生活

昭和 20 年(1945)3 月末にアメリカ軍の艦砲射撃が始まると、私たち家族は、家財道具を適当な場所に埋め、食料や衣類などを可能な限り持って、知名に造っていた自分たちの壕に避難した。当時のわが家は、明治 33 年(1900)生まれの祖父母と母親、兄弟 2 人の計 5 人家族だった。

そのころから、住宅地はアメリカ軍の飛行機からまかれたガソリンと焼夷弾で焼き払われた。知名の須久名原の大砲陣地への道路には日本軍が地雷を敷設していた。そのため、逃げまどう馬や牛などが地雷を踏んで爆発させていた。それらの死んだ家畜を食肉にしようと取りに行き、銃撃されて亡くなった人もいた。また夜間に、壕から家に宿泊しに行ったら焼死した家族もいた。

ワイトウの大砲陣地から 2, 3 発発砲すると、間もなく空爆とすさまじい艦砲射撃が 1 日中続いた。大砲陣地やスクナ森頂上の高射砲陣地、知名グスク海岸の特攻艇陣地がごとごとく爆破され、兵隊は各陣地を撤去するはめに追い込まれた。住民も迫ってくる艦砲射撃に、自分たちの壕では危ないという思いから、山を越えて佐敷方面へと避難を始めた。

私たち家族は、現在ゴルフ場になっているところ（守礼カントリークラブ）の道路を歩いて、佐敷村（現 南城市）伊原のウティンダ壕に避難した。何日かして、知名へ戻ろうと伊原の壕を出て歩いていた。その途中、スクガー屋取（現在の南城市知念字知念にあった。現在は廃村）のところまで来たときに、アメリカ兵の姿が見えた。そのため方向を変え、久原集落方面へ逃げて、その壕で生活した。

②あなたなら、壕から出る？

戦前

仲村 徳広（昭和11年生まれ）

〈知念村・佐敷村内へ避難〉

自宅が中城湾臨時要塞部隊の宿舎になる

〔1941年、中城湾臨時要塞が現在の与那原（現 与那原町）に建設され、中城湾臨時要塞部隊が駐屯するようになった。翌年9月の編成改正で、同部隊の重砲兵連隊第2中隊が、伊計島（現 うるま市）から知念半島（当時の村民の証言を総合すると、知念村知名・安座真・久手堅一帯だと思われる）へ移駐することになった。移駐時期は不明。また、いつごろかはわからないが、第2中隊は知念村民に「吉岡隊」と呼ばれるようになった。〕

第2中隊の浜田少尉が率いる第1小隊は、知念岬（ウフグシク原）に大砲陣地を2基構築した。二木少尉が率いる第2小隊は、知名の須久名原（ワイトウイ。岩の切り通しの道）に大砲1門と、野戦砲1門の陣地、知名グスク（クビリ）に防空壕を構築した。また、知名海岸には銃口が数カ所あった。

中隊長と3人の下士官（石原軍曹ほか2人）は個人の家を、ほかの一般兵は知名区事務所を宿舎にしていた。私の家にも、当時の区長だった神谷五福さんと、二木少尉と2人の部下が宿借りの相談に訪れ、二木少尉に12畳の床の間と廊下、勉強室を無償で貸すことになった。

かれらの食事は、当番兵が区事務所の一般兵隊舎の炊事場から運んでいた。朝夕の清掃も当番兵が行っていた。風呂は区事務所の隊舎に設置されていた。夜中に時々、女性の声が聞こえたが、その声が「慰安婦^{いあんふ}」だったのかどうかはわからない。

毎朝、陸軍の准尉^{じゆんい}が率いる12人ほどの兵隊が、二木少尉が泊っていた私の家の前を通り、門前で「歩調を取れ」という声で行進し、陣地壕掘り^{じんちごうほ}に出かけていた。

戦時中

日本兵に殺された知念村の人々

戦時中、知名の壕で日本兵による住民の虐殺があった。吉岡隊が知名城原^{ちなぐすくばる}（クビリ）に構築した壕から兵隊が撤収したあと、そこに知名出身の男性3人（1人は村の収入役、2人は字の幹部）が入って区民や家屋などの見守りのために滞在していた。

そこに逃亡兵が現れて「壕を出て行け」と言ったため、村収入役の男性が「民間人も戦場で戦っている中で逃げてくるとは何事か」と言ったところ、逃亡兵は「お前らはスパイだろう」と言うなり彼を銃殺した。残った2人は横穴から逃げて命拾いしたという。

射殺された男性の母親は当時90歳近く、村内でもまれな高齢者だった。ほかの家族がヤンバルへ疎開したあと、男性は高齢の母親を近くの岩穴に避難させて、毎日食事を届けていた。男性が亡くなったあと、私たちが知名の壕にいる間は、母親のいところにあたる私の祖母が代わりに食事を運んでいた。母親は、「息子が来なくなっているが元気か」と気にしていたという。私たちが伊原の壕に移動してからは食事を届けることができなくなった。その後、彼女は餓死^{がし}してしまったのではないかと。

男性を埋葬した場所は、のちにアメリカ軍が道路拡張のためブルドーザーで敷きならしてしまった。散乱した遺骨を、私たちが拾ってお墓に納めた。

③日本兵と住民との関係 戦前・戦時中とどうちがう？